■西都原発　考古学ノート

「生」と「死」を見つめて

本館は、西都原古墳群の中にあるフィールドミュージアムである。学術的に言えばそうだが、言い方を変えれば、古代の“墓場”の中にある博物館・・である。我々の仕事は、様々な調査研究によって、その“墓場”の中に、古代の人々の生きた証を求め、相互の関係を紐解きながら、当時の人々の生活文化を甦らせることである。

展示室のいたる処に、古代生活を想起させる言葉がちりばめられている。

生命を食らうことは、生きることである。確かに感謝を持って生命を食らうのだ。
里の茂みの中に絶えず、人影を認めることができるようになった。里の民が来たのだと、古老は話した。
大きな力が働き始めた。ムラとムラが互いに緊張感を持ち、クニが芽生える。

古墳や地下式横穴墓、遺跡などから発見された石器、土器、金属器、住居跡、装飾品等々の資料は、私たちに、当時の人々の衣食住のみならず、思想、人生観まで“無言”で語っている。「より豊かに生きたい。」という欲を原動力にした当時の人々の「生」が伝わってくる。例えば、女性を型取った土偶から、新たな命を宿し産するという存在を、神秘的なものとして崇めていた思想が伝わってくる。

波が打ち寄せる。砂地に足をとられながら、葬列は続いている。
死は個人的なものではなく、死者には生前の社会的な役割が刻印され、社会的な死を迎える。

「死」は人生の終わりである。生物学的にはその身体は分解され、風化していつかは土に還る。しかし、人々は死して葬られた後もなお、身体とは別のスピリチュアルな存在を信じていたことがうかがえる。死者の魂を乗せて、死後の世界に向かう船を描いた壁画や、被葬者の生前を再現した墳墓の玄室を見ると、故人を偲び、その不滅を願う周囲の思いが伝わってくる。それらは今、私たちが「生」と「死」に抱く思いと重なって見える。

話しかけて欲しかった。ただ、そんなことだった。
遠くに風の音を聞いた。暗闇は深く、星はすべて輝いている。必ず風は吹いてくる。

古代の人々は、ただその日暮らしの人生を送っていたわけではない。それぞれのコミュニティにおいて、互いを尊重し、助け合い、懸命に生きてきた。そして、人生の終焉を様々な思いで受け止めた。その思いは考古博の資料に受け継がれ、資料が見続けてきた映像は、今も、そしてこれからも、私たちに、そして、博物館を訪れる人々へ受け継がれていく。

君たちの時代の中を、君たちは、これからも歩み続ける。
営々と悠久の時間を積み重ねて人々が生きてきて、私たちに今を準備してくれた。
それらを受け継いで、私たちから君たちに残せたものが、未来にとって価値あるものであることを願っている。

（岡崎裕也）